

優秀賞

ぼくの誇り

鹿児島県 日置市立吉利小学校五年 山口 叶夢

「そいじゃ、いかんが。」

約一ヶ月間の練習の中で、指導者の満富さんと島中さんに、熱のこもった真けんな眼差しで何度も怒鳴られた。ぼくは、一番太鼓の大事な役わりを任せられ、一生けん命たたいているけれど、思ったとおりに出来ない。一番太鼓はかねと合わせなければならず、ぼくが間ちがえると踊り全体がくずれてしまう。怒鳴られるたびにくやくしてたまらず、自分には立たなかった。

ぼくたちの吉利地いきでは、四百年くらい前から続く伝統行事である太鼓踊りが、五こく豊じょうを祈って夏に行われる。三区で三年ごとに交代で行われ、今年も北区が当番で、ぼくも父と一緒に踊りに参加することになった。同級生の男子四人が鼓太鼓をむねにからって、母たちが作った色とりどりの花かざりの付いた大きなかさをかぶる。紹の着物を身

にまとい、赤い大きなふさががったひも付きのばちでたたく。父は、白しう束に大きな平太鼓をむねにからい、高さ二メートル程の勇ましい矢旗をせ負い、全身を使ってはげしく踊る。

満富さんから、太鼓踊りの歴史について話を聞いた。北区の太鼓踊りは戦いから帰ってきた人の苦勞をねぎらい踊ったとされ、負け戦の多かった北区の踊りはかねの音が悲しく聞こえたそうだ。他の区の出陣前の勇ましさに比べ、北区の踊りは大人しい分、衣しようににはかなりのこだわりがある。満富さんは、支度そろえからが伝統行事だと話してくれた。

本番数日前の夜、父と母の声で目が覚めた。

「出来た。やった、やった。やっと完成した。」達成感あふれる声。ぼくは布団から飛び起き、すぐさまかけよると、そこには、父と母が協力して手作りしたむらさき色のふくさが、しかもエメラルドグ

リーンに輝く大きな家紋入りで、光り輝いていた。
このふくさで、当日は、大事な鼓太鼓を包むように
かけるのだ。

そして、いよいよ本番当日。朝早く身じたくし、
きんちようしながら、一生けん命練習したとおり出
来るように、ばちに願いと気合いを入れ、力いっば
い太鼓をたたいた。ふくさも風になびいて一緒に踊
る。父たちの雷鳴のようなわれんばかりの平太鼓に、
すずしいかねの音色とぼくたちの息のそろった太鼓
の音が一つになり、町中にひびきわたった。

二十か所くらい踊り回って、夜になり、最後まで
踊りきったぼくたちを、地いきの方々が拍手で出む
かえてくれた。練習でたくさんくやしい思いをし
けれど、やりとげた想いとうれしさに大きく包まれ
た気がした。

この太鼓踊りを通じて、伝統行事は地いきの方々
とのつながりで受け継がれることを知った。また、
ぼくたちががんばったことで、この太鼓踊りが未来
へつながっていくことに大きな誇りを感じた。支え
てくれた父母と、がんばった自分に、胸がいっぱい
になった。

